



書の道は果てしなく

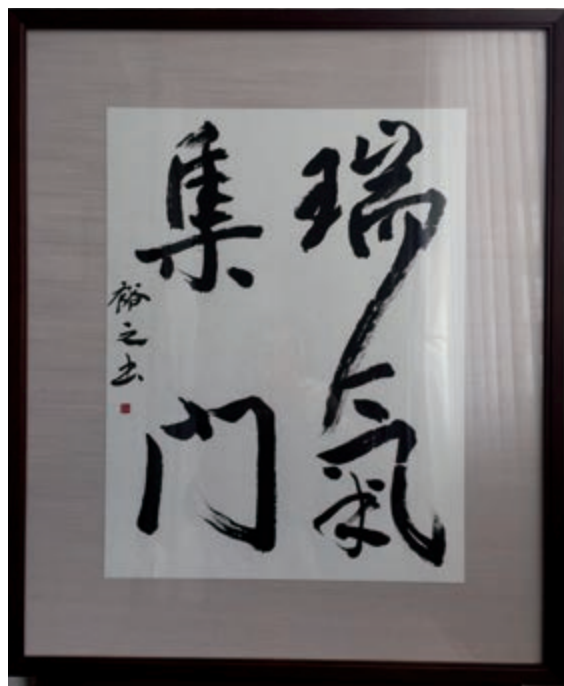
一般財団法人地域社会ライフプラン協会

棚橋 裕之

書道教室に通い始めて満3年になります。思い起こせば、小学生の時に近所の習字塾に通わせられ、高校の芸術の授業で選択して以来、実に約40年ぶりに文房四宝に親しむことになりました。既に、それ以前から3つの習い事を続けているのですが、さらに自分を表現できる類の「^{たしな}嗜み」を持ちたくなったのです。楽器の演奏や絵画・彫刻の制作は小学校以来不得手なたちなので、書の上達を後半生の励みとすることにしました。

書道教室では、日本書道教育学会の月刊競書雑誌の課題作品を毎月提出し、審査の結果昇級昇段していきます。先生の勧めに従い、漢字半紙（中国の古典から抜粋した4～6文字の臨書）、かな半紙（和歌を変体仮名交じりで書いた古典の臨書）に取り組むほか、さらにこの1年余りは、漢字条幅（「^{はんせつ}半切」といわれるもので掛け軸に表装するサイズ）も毎月提出しています。この3種は、使用する筆・紙・墨が違い、筆使いも大きく異なりますので、それぞれ別物と^{わきま}弁えて練習しないと上達できません。例えば、かなは上手に書こうと自意識過剰になると腕に余分な力みがでて、びびった線となり、かなの書の命である流麗かつ繊細優美な表現になりません。

また、臨書とは、お手本を忠実に模倣することなのですが、これが意外と難しいと毎月思い知らされます。未熟なため、手本の各文字や紙上での空間配置を何となく漫然と眺めているだけであって、1つの文字における点画の間、線の太細や傾きの違いとか墨の潤濁が醸し出す妙味、あるいは、文字同士の間、上下左右の余白の取り方が会得できていません。教室では、何枚か練習した上で清書し



先生に添削してもらいますが、いまだに自分一人で臨書していた時には全く気づいていなかった点を指摘されて「目から鱗が落ちる」ことがよくあります。他のお稽古事も同じですが、長い歳月を経て磨き上げられてきた「型」をなぞるという研鑽を積むことが重要です。いずれ「型」を自由自在に使いこなせるようになることが究極の目標です。その意味では、きわめて奥の深い、それだけに挑戦しがたいのある素養だとつくづく思います。

書には書いた人の内面が表れるそうです。つまり、書道は単なる造形芸術ではなく、その作者の品格がにじみ出るといわれています。そう聞くと進むべき道は^{ぜんとりょうえん}前途遼遠ですが、時間的余裕も将来益々できるので、「^{ぜんしゅうとんご}漸修頓悟」を信じて倦まずたゆまずお稽古にいそしんでいきたいと思えます。